

〔報 告〕

男子看護学生が看護師学校養成所へ入学するまでに体験した困難とその解決

Difficulties and solutions for male nursing students before entering a nurse training school

上杉 佑也¹⁾ 前田 貴彦¹⁾ 平田 研人²⁾ 古川 陽介³⁾
辻本 雄大⁴⁾ 福田 豊洋⁵⁾ 藤本 泰博⁶⁾

【要 旨】

本研究は、男子看護学生が看護師学校養成所へ入学するまでに体験した困難とその解決に必要と考えることを明らかにすることを目的に、男子看護学生24名を対象にフォーカス・グループ・インタビューを行い、内容の類似性・関連性からカテゴリー化を行った。男子看護学生の困難として33のサブカテゴリーから【看護師を目指す気持ちを揺るがす周囲の反応】【進路選択に役立つ情報の収集や共有が難しい状況】【男性看護師としての将来像のイメージしにくさ】等の9のカテゴリー、解決に必要と考えることとして10のサブカテゴリーから【男性から話を聞くことができる】等の4のカテゴリーが生成された。男子看護学生は、少数派に属することや男性看護師の看護の実際といった情報が不足することで困難を生じ、他者に相談しにくい状況が伺えた。男子高校生らへの支援として、同じ立場や経験を有する同性から話を聞くことができる機会の必要性が示唆された。

【キーワード】 男子看護学生 看護師学校養成所 進路選択 困難

I. はじめに

男性看護師の就業数は年々増加傾向にあるが、男性看護師の看護師全体に占める割合は2014年73,968人、6.8%程度¹⁾、男子看護学生の看護師等学校養成所の入学者数全体に占める割合は2014年で11,782人、14.3%程度にあり²⁾、男性看護師・男子看護学生ともに依然として少数派という現状にある。男性看護師及び男子看護学生は、女性患者への対応や女性看護師・女子学生との関係において、性差によるケアの困難さや少人数での肩身の狭さを体験していることが明らかとなっており^{3,4)}、女性とは異なる男性特有の困難な状況が存在していることが伺える。

多くの者が進学を選択する時代になっている日本では、進路選択において多くの高校生が自分の適性がわ

からない、やりたいことがみつからないといった不安や将来働くことについての気がかりを感じており^{5,6)}、一般的に進路選択には職業選択を見据えた困難が生じているといえる。職業の1つである看護師について高校生が感じるイメージとして、「精神的に苦労が多い」「ヒトによって向き不向きがある」「人を相手とする難しい仕事である」等の項目が高いことが報告されており⁷⁾、ネガティブなイメージも抱かれていることが伺える。また、岡本は、医療福祉系を目指す高校生において「職業の選択を間違ってしまうのではないかと不安で、職業についてもうまくやっていく自信がないと、迷いながら情緒的に混乱している姿」が明らかになったとしている⁸⁾。そして、看護系大学1年生を対象とした研究において、看護を学ぶ不安として専門的知識

受付日：2023年5月10日 受理日：2023年9月1日

1) Yuya UESUGI, Takahiko MAEDA：三重県立看護大学

2) Kento HIRATA：天理よろづ相談所病院

3) Yosuke FURUKAWA：名古屋市立大学病院

4) Takahiro TSUJIMOTO：奈良県立医科大学附属病院

5) Toyohiro FUKUTA：伊勢赤十字病院

6) Yasuhiro FUJIMOTO：聖マリアンナ医科大学病院

や技術、人間関係に関する現実的な不安と、対象が不明瞭で漠然とした神経症的な不安が認められたとされ⁹⁾、これは進路選択を行う高校生らにも通じるものと思われる。

以上より、看護師学校養成所（以下、看護学校）への進路選択は職業選択と同義に近く、看護師という専門職種を選択することに関連した困難を抱くことが推察される。このような状況に加えて、世間的に女性職のイメージが強く、女性と比べて少数派となる看護師を志望する男子高校生らが、学生生活や就労を見据えた不安を生じるなど、男子看護学生や男性看護師に関する研究と同様に女性とは異なる困難を抱くことは想像に難くない。つまり、男子高校生らの看護学校への進路選択においては、職業選択の迷いや学力の心配といった『進路選択に共通する困難』、負担が重そうな看護師という職業選択を決定するという『看護師を志望するが故の困難』、さらに『看護師を志望するが故の困難』において少数派となることや男性であるがゆえに生じうる『男性に生じやすいと考えられる困難』を体験することが推察される。しかしながら、日本では看護師や看護学生の研究において女性が対象であることが多く、男子高校生らが看護学校への進路選択過程においてどのような困難を体験し、その困難の解決に必要と考えていることについて焦点を当てた研究は見当たらない。

そこで、本研究は、男子看護学生が看護学校へ入学するまでに体験した困難及び困難を解決するために必要と考えることを明らかにすることを目的とした。男子看護学生が進路選択過程で体験した困難の内容や困難を解決するために必要と考えることを明らかにすることは、進路選択を行う男子高校生ら、あるいは入学後の男子看護学生への援助を行うための一助になると考えられる。

II. 方法

1. 研究デザイン

質的記述的研究

2. 研究参加者

研究参加者は、東海地方の看護学校2校に在籍している男子看護学生で、候補となる男子看護学生全員に研究説明依頼書を配布した。なお、研究参加者の社会

人経験や年齢は問わないが、過去に医療職としての職務経験がある者は、医療職への進路選択の経験が結果に影響を及ぼすと考え、対象者から除外した。また、本研究は看護師を志望する看護学生の困難及び困難の解決に必要と考えることを明らかにすることを目的としているため、志望する資格が異なる准看護師養成課程校の志望者は研究対象者からあらかじめ除外した。

3. 用語の操作的定義

「困難」とは、男子看護学生が看護学校に入学するまでの進路選択過程で生じた不安、ストレス、悩み、心配等といった陰性感情を伴う出来事やその要因となる事柄とした。

4. データ収集期間とデータ収集方法

2015年11月から2016年1月に、フォーカス・グループ・インタビュー（以下、FGI）による半構成的面接を5回行った。主な質問内容として「看護師への進路選択を考え始めた時から、看護学校への入学に至る進路選択の過程で体験した困難、学校生活及び就労を想定することに関連した不安や悩み、それらを軽減・解決できたあるいは軽減・解決のために有効と考える方策」について自由に語ってもらい、許可を得て録音とメモをとった。FGIは、1対1のインタビューよりも自分の意見を述べやすい一方で、発言力の弱い参加者は意見を述べにくいという問題点が指摘されており^{10, 11)}、意見が出やすいように各グループのメンバーは同一校・同学年の学生で構成した。

5. 分析方法

グループごとの面接内容から匿名処理を行った逐語録を作成し、看護学校へ入学するまでに体験した困難及び困難を解決するために必要と考えることについて話された部分を抽出してコード化した。コードの類似性、関連性のあるものを整理し、抽象度を比較しながら、サブカテゴリー、カテゴリーを生成した。分析結果の信頼性・妥当性を確保するために、共同研究者と繰り返し確認を行い精査した。

6. 倫理的配慮

本研究は、三重県立看護大学研究倫理審査会（通知書番号151002）及び研究参加者所属施設の倫理委員

会の承認を得た上で実施した。研究参加者に対し、研究説明書を用いて、研究の主旨、方法、プライバシーの保護、所属する学校関係者に個人が特定されるデータの漏洩や成績等への影響がないこと、自由意思による参加と辞退による不利益がないこと、同意の撤回、面接中の心身の負担、結果の公表、等について説明し、同意書への署名をもって同意とみなした。

Ⅲ. 結果

面接は1グループにつき1回実施し、分析対象とした5回の面接の参加者は24名で、うち社会人経験者は4名、男子看護学生の平均年齢は21.3±4.43歳、平均面接時間は64.2±8.13分(54~74分)であった(表1)。以下、生成されたカテゴリーについて説明する。なお、カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは《 》、研究参加者の具体的な発言は斜体で「 」内に示した。

1. 看護学校へ入学するまでに体験した困難

男子看護学生が看護学校へ入学するまでに体験した困難として33の《サブカテゴリー》から9の【カテゴリー】が生成された(表2)。

【看護師を目指す気持ちを揺るがす周囲の反応】では、「女性ばかりの所だと肩身が狭いぞとか、本当にお前やっついていけるのかとずっと言われて、女性がいっぱいいるっていう理由で自分の入学を否定されるのは嫌だった」「やっぱり女性が多い所に飛び込んでいくっていうのは、周りの子になんか、変な目的があるとか。そんな感じで言われるのはよくありました」と、適応力を疑われることやからかいの対象となるなど《男性

が看護師を目指すことへの周囲の理解が得にくい》という経験をしていた。また、社会人経験者では「会社を辞める際に男性が看護師になることについて周囲に納得してもらえず困った」という者もいた。さらに、「母親は女の人のいっぱいの職場だから続くかどうか不安だったんじゃないですかね。(母親に心配されることで)若干不安になりました」と語る対象者の様に《男性が看護師という職業に就くことについて周囲に心配される》体験や《学生生活について周囲に心配される》体験が困難の要因となっていた。

【看護師を目指すことを決断して良いのか迷う気持ち】では、薬剤投与時の医療過誤への危惧や血液を扱うことに耐えられるかわからないという不安から、自分に《看護師としての適性があるのか気になる》ことが困難の要因となっていた。また、「男やのに看護なの？大丈夫なのそれ？とマイナスなことを言われることもあるんですよ。迷っているときは、本当にこれでいいのかなあと思った」と、《男性である自分が看護師を目指すことに自信が持てない》という気持ちを抱いていた。

【女性が多数を占める環境で過ごすことに対する後ろ向き的心境】では、「看護師って女性の職場みたいなイメージがあって、働くうえで情報共有とかコミュニケーションとっていくときに、気を使ったり、抵抗があって心のゆとりがなくなるというか、いろんな面でプレッシャーに感じそう」のように《女性とのコミュニケーションに不安や苦手意識がある》ことが困難の要因となっていた。また、「受験の時とかに、男が少ないから、女の子たちに、あ、男の子がおるって思われるのがすごく嫌で」「合同説明会があるので、その

表1 研究参加者の概要

グループ	参加者	養成課程	学年	年代	備考
A	6名	専門学校	3年生	20-24歳:2名 25-29歳:1名 30-34歳:3名	社会人経験者4名含む
B	7名	専門学校	1年生	18-19歳:7名	
C	2名	専門学校	2年生	18-19歳:1名 20-24歳:1名	
D	5名	大学	2年生	18-19歳:1名 20-24歳:4名	
E	4名	大学	2年生	18-19歳:1名 20-24歳:3名	

場所に足を運んで、情報を手に入れるんですけど、説明会自体も女子が多いんですよ。そこにまず、入っていくっていうのが、すごいつらかった」と《受験や説明会の際に周囲の女性の視線が気になる》や「(高校の看護進学コースの授業において) 女子が30人位いる中、男子1人ぽつんって、こんな中で授業受けるのきついなあって、疎外感を感じた」のように《高校で女性の多い中で授業を受けることがつらい》という体験をしていた。

【進路選択に役立つ情報の収集や共有が難しい状況】では、「看護系の学校の進路については話し合える友達、共感できる友達がいなくてということが、ちょっと不安だった」と《進路について相談できる人がいない》

という現状が見られた。また、「周りに医療関係の仕事に就いている人がいなかったのも、うそはついてはいないだろうけど、逆に、本当のこと全部話してくれているのかっていう不安はありましたね」と《(高校の)先生も意外と情報が少ないので。こうだと思つてか、何となくの情報しかなくて、情報源が少ないので苦労した》のように《受験や看護についての情報が得にくい》と感じ、特に社会人経験者では「学校からの情報がないため、男性数について個人で情報を得るしかなかった」という状況が見られた。また、「男子という面で面接内容や合格者が変わってくることはあるのか、そういう情報が全くなかった」と《男性の入学者数に制限があるのではないかと気になる》様子が見られた。

表2 男子看護学生が看護学校へ入学するまでに体験した困難

【カテゴリー】	《サブカテゴリー》
看護師を目指す気持ちを揺るがす周囲の反応	男性が看護師を目指すことへの周囲の理解が得にくい 男性が看護師という職業に就くことについて周囲に心配される 学生生活について周囲に心配される
看護師を目指すことを決断して良いのか迷う気持ち	看護師としての適性があるのか気になる 男性である自分が看護師を目指すことに自信が持てない
女性が多数を占める環境で過ごすことに対する後ろ向きの心境	女性とのコミュニケーションに不安や苦手意識がある 受験や説明会の際に周囲の女性の視線が気になる 高校で女性の多い中で授業をうけることがつらい
進路選択に役立つ情報の収集や共有が難しい状況	進路について相談できる人がいない 受験や看護についての情報が得にくい 男性の入学者数に制限があるのではないかと気になる
学生生活について漠然としたイメージしか描けないことから生じる不安	看護学生の大変さがよくわからない 実習の内容について気になる 看護に関する勉強や演習といった授業について気になる 男性用の設備が少ないため学生生活が大変そうだと感じる
学生生活での人間関係に対する気かり	男子学生が少ないことで学生生活に不都合が生じるのではないかと気になる 男子学生の悩みを教員が理解してくれるか気になる 女子学生と馴染めないことで学生生活に不都合が生じるのではないかと気になる 男子学生と馴染めないことで学生生活に不都合が生じるのではないかと気になる 社会人経験者の同級生とうまくやっつけられるか気になる
看護師の職業イメージに関する気かり	看護師の仕事についてよくわからない 看護師の仕事内容について大変そうだと感じる 不規則な看護師の勤務について気になる 常に規律ある生活を求められる職業である 年齢を重ねた時に医療の知識についていけるか気になる 年齢を重ねた時に体力的に働けるか気になる
就労後の人間関係に対する気かり	女性患者の看護が難しいのではないかと気になる 患者とのコミュニケーションがとれるか気になる 女性看護師と馴染めないことで就労後に不都合が生じるのではないかと気になる
男性看護師としての将来像のイメージしにくさ	男性看護師の西葛に制限があるのではないかと気になる 年齢を重ねた男性看護師のイメージがつかない 年齢を重ねた時に男性看護師は嫌がられるのではないかと気になる 男性看護師が昇進できるかわからない

【学生生活について漠然としたイメージしか描けないことから生じる不安】では、「看護学生も大変っていうイメージだけはあって、大変って言われても何が大変なのかさっぱりわからなかった」といった《看護学生の大変さがよくわからない》や《実習の内容について気になる》、《看護に関する勉強や演習といった授業について気になる》、《男性用の設備が少ないため学生生活が大変そうだと感じる》等、学生生活の実際について不安を感じていた。そして、「女性にくっついて一緒にやらないといけない援助もあるということは聞いていたんですけど。学生同士でやる際にも嫌じゃないのかなみたいな」のように、男女で一緒に演習をすることについて不安が生じていた。

【学生生活での人間関係に対する気がかり】では、「演習で男子だけでやることと、女子でもできるっていうところは多分あるなって思っている。いろんな人を経験してみたいんで、男子が少ないとあんま経験できないんじゃないかなって」「女性同士でくっつくイメージがあるので、少数派はやっぱり損することがわかり多いかなど」のように《男子学生が少ないことで学生生活に不都合が生じるのではないかと気になる》や「男性にしか分からないっていうような悩みとか不安はあるし。先生はそういうのも分かった上で接してくれるのかなあ」と、《男子学生の悩みを教員が理解してくれるか気になる》様子が見られた。また、「(女子同士の関係の中に) 男性がどう入っていくか、結構考えました。いざ、勉強始まってからわからない、でも周りに聞けないってなったらどうしようって」のように《女子学生と馴染めないことで学生生活に不都合が生じるのではないかと気になる》や「男子の数がそもそも少ないことで、仲よくせざるを得ないわけじゃないですか。そっち失敗したらもう終わりっていう不安はありました」のように《男子学生と馴染めないことで学生生活に不都合が生じるのではないかと気になる》、《社会人経験者の同級生とうまくやっていけるか気になる》様子が見られ、良好な人間関係の構築に不安を感じていた。更に、社会人経験者は「現役生と年が離れていたんで、やっぱそこで特に女の子となじめるかなあって」と、年齢が離れていることも困難の要因となっていた。

【看護師の職業イメージに関する気がかり】では、「看護師って職業が専門性が高く。何をやるんだろう、

何をできるんだろうとは考えましたね。漠然とそういう不安はありました」のように《看護師の仕事についてよくわからない》と感じていた。逆に、身近な医療職者からの情報により看護師についてのイメージが形成されていることで《看護師の仕事内容について大変そうだと感じる》や《不規則な看護師の勤務について気になる》様子が見られ、「休日に遊びに来ているところをSNSなんか載っけたりすると。そういうの、入院中の親御さんが見たりして、うちの子がこんなに頑張っているのに遊んで、どういうことなのっていうニュース見て、それを考えるとすごい怖い職業だなあと。オンオフの切り替えのときでさえも、看護師であるっていうものを置いていけないっていう」のように《常に規律ある生活を求められる職業である》ということに不安視していた。また、知識や体力を求められる職業というイメージから《年齢を重ねた時に医療の知識についていけるか気になる》、《年齢を重ねた時に体力的に働けるか気になる》と、継続的な就労についての気がかりが生じていた。

【就労後の人間関係に対する気がかり】では、「世間的に男性看護師が少ない印象なので、いざ女性患者を受け持ったりしたらどうなっちゃうんだろうみたいなのはやっぱりあります。男性は嫌だって言ってくる人もいるでしょうし、どうやって対処していけばいいかわかんない」や「きっと、女性の患者だったら男性は多分きついというか。恥ずかしいっていう思いもあるのかなっていうのはあります」のように《女性患者の看護が難しいのではないかと気になる》や《患者とのコミュニケーションがとれるか気になる》といった困難が生じていた。また、女性看護師に質問をしにくいことやトラブルが生じた際に居づらくならないかといった《女性看護師と馴染めないことで就労後に不都合が生じるのではないかと気になる》様子が見られた。

【男性看護師としての将来像のイメージしにくさ】では、「なんかこう、男だからできる部分とかできない部分があるから。自分の就職する科に、制限とかがちよっとあるのかなあみたいな、男はこう力が強いからそういう科に行けみたいな、誘導みたいなのがあのかなあとか思っていました」と《男性看護師の配置に制限があるのではと気になる》と感じていた。また、「年配の看護師のイメージがないっていうか、見たこ

とも聞いたこともなかったのでそのまま継続して働いているのか。それとも施設とかで看護師として働くのか…、若いうちしかできないようなイメージがありました」のように《年齢を重ねた男性看護師のイメージがつかない》や「僕が患者だったら、おじさんに看護されたくないと思うんで、見た目とか、しっかりしていかないといけないなって」と、《年齢を重ねた時に男性看護師は嫌がられるのではないかと気になる》様子が見られた。そして、「看護師長、男性はそれになれるのかっていう。どこの病院行っても、女性ばかりだから」と《男性看護師が昇進できるかわからない》と感じており、年齢を重ねた男性看護師に関する実情がわからないことが困難を抱かせる要因となっていた。

2. 困難を解決するために必要と考えること

男子看護学生が困難を解決するために必要と考えることについては10の《サブカテゴリー》から4の【カテゴリー】が生成された(表3)。

【男性から話を聞くことができる】では、オープンキャンパス等で《男子看護学生から話を聞ける》や「男性看護師から、結構男やからこれができるっていうのを聞いてきて、こうモチベーションに繋がったり、不安を上書きするためのやる気に繋がったりとかしました」といった《男性看護師から話を聞ける》のように、男性の立場として話を聞けることが安心に繋がると考えていた。また、情報収集の際の環境として、《職場体験に男性看護師がいる》ことで安心と感じていた。

【看護に関する信頼のおける情報が得られる】では、「逆にどんな悪いことがあるかっていうデメリットば

かり挙げてもらった方が、男の場合は逆に覚悟がつくかな、っていうのもあります」等と考えている者もあり、《看護師学校養成所からの情報提供においてデメリットについても知りたい》と考えていた。また、「周りに医療関係の人がいると、目指していくビジョンがある程度予測がつくので、その情報源があるのは大きいと思う」「看護師に男がなれるっていうことは母からも聞いて、大丈夫やろっていう後押しはしてもらいました」のように《身近な医療関係者から看護に関する話を聞ける》ことが強みとなると考えていることや《高校の教員から看護に関する情報を得られる》ことが必要と感じていた。

【自分で看護に関する情報を得るために努力する】では、「看護師になることを後押ししてくれる言葉がかなり抽象的なんで、職場のイメージがあまりつかなかったですね。だから、看護師体験行かせてもらって、自分で得たものの方がイメージがついてプラスになってきました」と《オープンキャンパスや看護体験に参加すること》や「待遇だったりとか、男性看護師ってできることって何だろうな、とは少し調べて解消された部分は少しありました」のように《男性看護師について自分で情報を調べる》ことが困難の軽減に繋がると実感していた。

【同じ立場の人と進路について相談できる】では、《男子限定のオープンキャンパスだと参加しやすい》と感じることや「志望動機とか、教師や親に聞いても答えにくい部分なので、生徒同士で情報共有したい」のように《生徒同士で情報共有できる》ことが必要と考えていた。

表3 男子看護学生が困難を解決するために必要と考えること

【カテゴリー】	《サブカテゴリー》
男性から話を聞くことができる	男子看護学生から話を聞ける 男性看護師から話を聞ける 職場体験に男性看護師がいる
看護に関する信頼のおける情報が得られる	看護師学校養成所からの情報提供においてデメリットについても知りたい 身近な医療関係者から看護に関する話を聞ける 高校の教員から看護に関する情報を得られる
自分で看護に関する情報を得るために努力する	オープンキャンパスや看護体験に参加する 男性看護師について自分で情報を調べる
同じ立場の人と進路について相談できる	男子限定のオープンキャンパスだと参加しやすい 生徒同士で情報共有できる

IV. 考察

男子看護学生が看護学校へ入学するまでに体験した困難には、《看護師としての適正があるのか気になる》《不規則な看護師の勤務について気になる》《看護師の仕事についてよくわからない》《常に規律ある生活を求められる職業である》といった困難が見られ、これらは『看護師を志望するが故の困難』といえ、誰しも共通して生じうる困難と考えられる。一方で、《男子学生が少ないことで学生生活に不都合が生じるのではないかと気になる》といった困難は、男性が少数派であることに起因すると考えられる。また、《女性患者の看護が難しいのではないかと気になる》ことや《男性が看護師を目指すことへの周囲の理解が得にくい》ことは、女性とは異なる男性という性別に起因している困難といえ、これらは『男性に生じやすいと考えられる困難』として、大別できると考えられる。以下、本稿では『男性に生じやすいと考えられる困難』と支援の在り方について考察していく。

1. 女性と比べて少数派という立場に身を置かれること

看護師は男性が少ない職業であることは自明であり、看護師を志望する男子高校生らは自ずと少数派に属することとなる。集団間において、少数派であることがステレオタイプや偏見の原因になりうることが指摘されている¹²⁾。また、大学生の友人関係機能として「親密性機能」「安定化機能」「支援機能」があることや、友人関係満足度の低さが大学不適応に間接的な影響を持つといわれていることから^{13, 14)}、良好な友人関係を構築できることが学生生活においては重要といえる。さらに、同性との関係の特徴として、同性友人に同類性や安心感を感じており^{15, 16)}、同性が少ない環境下で女性と良好な関係性を構築できないことを危惧することで《男子学生が少ないことで学生生活に不都合が生じるのではないかと気になる》といった学生生活、あるいは《女性看護師と馴染めないことで就労後に不都合が生じるのではないかと気になる》といった就労後の環境について、不安を抱くことに繋がるものと推察される。

2. 不確かなイメージや先行するイメージから形作られる懸念

男子看護学生は【学生生活について漠然としたイメー

ジしか描けないことから生じる不安】や【看護師の職業イメージに関する気がかり】といった困難を生じていた。鈴木は、ネガティブ空想は職業的不安を高めると指摘していることから¹⁷⁾、具体的なイメージがつかないことや不確実な情報から作られる漠然としたネガティブなイメージは、学生生活のみならず、就労後を想定した不安を生じる要因になりうると考えられる。

【男性看護師としての将来像のイメージしにくさ】が生じる背景には、昇進意欲は女性と比較して男性のほうが高いという報告¹⁸⁾があることや日本では一般的に男性が経済的基盤を担うことが多い現状があることから、男子高校生らはキャリア形成を意識しやすいものと考えられる。そして、矢原は伝統的に女性向きの職業とみなされてきた職業に就く男性固有の課題として、他の職業に比べ社会的および経済的評価が低く抑えられてきたという問題があるとしている¹⁹⁾。そのため、男性看護師の昇進の実情が不明瞭であることや評価が低い職業と捉えられうる現状においては、キャリア形成に不安を抱くことに繋がるものと思われる。さらに、本研究では男性看護師が年齢を重ねることで女性の中で居づらくなるのではないかと、患者に嫌がられるのではないかとといった懸念も抱いていた。学生の高齢者に対するイメージでは、高齢者をステレオタイプで捉えていることや男性高齢者よりも女性高齢者を肯定的に評価する傾向にあることが報告されており^{20, 21)}、男子看護学生は加齢により、自らもネガティブなイメージを周囲に認識されやすいものと捉えていることが推察される。

船橋は、患者は異性の看護者から処置を受けるとき、同性の看護者から受けるよりも一層強く羞恥感情が呼び起されやすいことを指摘し²²⁾、山田は、男性が行うケアは特に女性にとって嫌がられる、もしくは好まれないのどちらかに陥ってしまうと結論付けている²³⁾。また、江原は、女らしさと評価される「同情的で、困っている人に対して思いやりがある」という特性は、人の世話をすることに対して適性があると位置づけられるとしている²⁴⁾さらに、女性はもともと「子どもをケアする存在」だと一般に思われており、子どもをケアすることは性的関心なしにやさしく触ったりする行為を含んでいることから、女性が行うケアは性的関心なしにケアができるというイメージを生み、恥ずかしさを生じさせないという利点があるとも述べている²⁴⁾。

これらの調査からも、看護師は女性が行う職業だという性役割と密接に結びついた職業像を抱きやすいといえ、セクシュアリティや先に述べた社会的・経済的評価のイメージから男性が就くべき職業ではないという固定観念が生じるものと考えられる。そのため、看護師は女性の職業であると感じている人々にとって、家族であれば看護師への進路を反対や不安視されることに繋がり、あるいは先に述べたように高校生の看護師へのイメージの中にはネガティブなイメージも存在するため、周囲の同級生からは時に驚きやからかいといった反応が生じるものと思われる。

3. 情報収集や情報共有をし難い状況

本研究で男子看護学生は【進路選択に役立つ情報の収集や共有が難しい状況】という困難を有していた。看護系進路選択における調査において、学校や入試に関する情報の入手先として4割の者が高校教諭を挙げている。一方で、教員は「養成課程の違いが分かりにくい」「看護職の仕事内容の情報が少ない」などと看護系進路指導に困難を有していることが報告されていることから^{25, 26)}、教員から具体的な進路指導が得にくいことが考えられる。また、「女子学生と馴染めないことで学生生活に不都合が生じるのではないかと気になる」、「女性患者の看護が難しいのではないかと気になる」といった男子高校生らが知りたいと考える情報は、当事者である男性のみが知りうる内容といえる。しかしながら、情報収集の機会として貴重なオープンキャンパスや学校説明会等への参加を躊躇していることが伺え、学生生活や就労後の実情についての情報を得る機会は限定的と思われる。

鹿内の調査では高校3年生の男女ともに、教師が母親に次ぐ2番目の相談相手となっており、誰かに相談すること、相談相手が多いことが進路決定自己効力の高さおよび職業未決定の低さと結びついていたとしている²⁷⁾。ところが、先に述べたように教員からは具体的な情報を把握しにくく、家族や友人からはネガティブな反応がみられ、周囲に看護師を志望する男性が少ないことから、男子高校生らは生じている心配などといった困難を自身で解決せざるを得ない状況にあるといえ、進路選択に対する自己効力感も育ちにくいものと推察される。

4. 進路選択過程における支援について

中野は、特定の専門職への適応が強く求められる医療系専門学校生にとっては進学の段階で、その専門分野についての適性があると判断できていることが、入学後の適合意識に影響を与えているとしている²⁸⁾。また、浦上は、進路選択に対する自信の無さを進路選択に対する自己効力が低いと読み替えられるとし、自己効力を高める方法として、進路選択行動を行っている先輩の姿を見聞きすることも情報源になるという代理的体験、不安感情を軽減させるような介入を行う情動的喚起などがあるとしている²⁹⁾。限られた情報の中で具体的なイメージができないことやネガティブなイメージが作り出されることは、適性の自覚にも影響を及ぼすものと思われ、これらを踏まえた支援を行っていくことが必要と考える。

本研究結果より、男子看護学生は少数派に属することや女性との関係性、男性看護師の将来像が見えにくいといった、男性に生じやすい体験に関する具体的な情報が少なく、加えて進路選択過程で生じる将来の不安や相談がしにくいという状況により、困難が生じていると考えられる。進路選択後の具体的なイメージを作るためには、男子看護学生が【男性から話を聞くことができる】ことが必要と考えていることから、オープンキャンパスや看護体験を機会として、実際に体験をした同性から情報収集できることが先の代理的体験に当たると考えられる。また、同じ立場である者と不安な気持ちを吐露したり、共感し合えたり出来る場を提供することは情動的喚起となり、進路選択に対する自己効力感を高めることに繋がると思われる。男性看護師の多くが、女性患者の特に羞恥心を伴うケアにおいて拒否された経験を有している一方で³⁰⁾、男性看護師から看護を受けた経験のある患者は、未経験者より肯定的な認識を持っているとの報告も散見される³¹⁾。《看護師学校養成所からの情報提供においてデメリットについても知りたい》との思いも見られることから、男性看護師は羞恥心を伴うケアにおいて配慮が必要という事実と併せて、男性看護師が実際に行っている対応についても伝えるなど、肯定的・否定的な情報と実情も含めた偏りの少ない情報提供を行う中で、自身の適性を判断してもらう必要があると考えられる。また、当事者である男子高校生らのみならず、その周囲の人々へも男子看護学生・男性看護師の現状に関する情報提

供をしていくことによって、家族が抱える心配を払拭できたり、進路指導・相談を担う高校教諭が効果的な介入が行えたりすることで、結果的に困難を軽減することに繋がると思われる。そして、今後、社会人経験を有する男子看護学生が増加することも考えられ、社会人経験者が入学前に欲しい情報として学生の体験談が多かったとしていることから³²⁾、ニーズを満たせるような情報収集の機会を提供することが必要といえる。

今後の課題として、研究参加者の背景において持病がある場合や社会人経験者である場合、周囲に医療関係者がいる場合等で困難の性質に大きく影響を及ぼしていることが伺えるため、対象者の背景を限定していくことが必要と思われる。また、示唆を得られた支援を実際に行うことによって、男子高校生らの困難の解決となり得るか検証が必要である。

V. 結論

男子看護学生が看護学校へ入学するまでに体験した困難として、【看護師を目指す気持ちを揺るがす周囲の反応】【看護師を目指すことを決断して良いのか迷う気持ち】【女性が多数を占める環境で過ごすことに対する後ろ向きの心境】【進路選択に役立つ情報の収集や共有が難しい状況】【学生生活について漠然としたイメージしか描けないことから生じる不安】【学生生活での人間関係に対する気がかり】【看護師の職業イメージに関する気がかり】【就労後の人間関係に対する気がかり】【男性看護師としての将来像のイメージしにくさ】の9カテゴリー、困難を解決するために必要と考えることとして【男性から話を聞くことができる】【看護に関する信頼のおける情報が得られる】【自分で看護に関する情報を得るために努力する】【同じ立場の人と進路について相談できる】の4カテゴリーが生成された。男子高校生らへの支援として、同じ立場や経験を有する同性から話を聞くことができる機会の必要性が示唆された。

【謝 辞】

本研究の実施にあたり、ご理解とご協力を賜りました看護学校の諸先生方、面接にご協力いただいた男子看護学生の皆様に厚く御礼申し上げます。なお、本研究は平成27年度三重県立看護大学学長特別研究費で実施した研究の一部である。また、本研究の一部を第36回日本看護科学学会学術集会で発表した。

【文 献】

- 1) 厚生労働省：平成26年衛生行政報告例（就業医療関係者）の概況，2016. 4. 20, <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/eisei/14/dl/gaikyo.pdf>
- 2) 厚生労働省：平成26年度看護師等学校養成所入学状況及び卒業生就業状況調査，2016. 4. 20, <https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00450141&tstat=000001022606&cycle=8&tclass1=000001070742&tclass2=000001070695&second2=1>
- 3) 高橋良，田中真琴，任和子：一般病棟に勤める男性看護師が職場で感じる困難とその対処，京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻紀要 健康科学，9，41-51，2014.
- 4) 飯高直也，多喜田恵子：男子看護学生が大学生活で遭遇する困難な体験，日本看護学会論文集，精神看護，41，155-158，2011.
- 5) 浅川和幸：進路指導の転換期における高校生の職業意識—北海道S市を事例に—，北海道大学大学院教育学研究科紀要，98，37-68，2006.
- 6) リクルート進学総研：第6回高校生と保護者の進路に関する意識調査，2016. 4. 20, http://www.zenkoupre.org/pdf/siryobox/chosakenkyu/shinroishiki_haifu20140208.pdf
- 7) 佐藤信枝：高校生が感じる看護職のイメージと理解度，ヘルスサイエンス研究，13（1），91-98，2009.
- 8) 岡本佐智子，渋谷えり子：高校生の職業選択の意識 医療福祉系の職業を志望する学生を対象として，日本看護学会論文集 看護教育，38，201-203，2008.
- 9) 本江朝美，高橋ゆかり，桑田恵子，他：看護学生の不安に対する認知的評価とSense of Coherenceとの関連，上武大学看護学部紀要，5（1），2-11，2009.
- 10) Suzan K.Grove, Nancy Burns, Jennifer R.Gray：バーンズ&グローブ 看護研究入門 原著第7版 評価・統合・エビデンスの生成，pp.246-247，エルゼビア・ジャパン，東京，2015.
- 11) 千年よしみ，阿部彩：フォーカス・グループ・ディスカッションの手法と課題：ケース・スタディを

- 通じて, 人口問題研究, 56 (3), 56-69, 2000.
- 12) 上瀬由美子: ステレオタイプの社会心理学 偏見の解消に向けて, pp.33-38, 東京, サイエンス社, 2002.
 - 13) 小塩真司: 大学生における想起された友人の特徴と友人関係機能との関連, 早稲田大学大学院文学研究科紀要第1分冊, 58, 5-19, 2012.
 - 14) 中村真, 松田英子: 大学への帰属意識が大学不適応に及ぼす影響 帰属意識の媒介効果における性差および適応感を高める友人関係機能, 江戸川大学紀要, 24, 13-19, 2014.
 - 15) 西浦真喜子, 大坊郁夫: 同性友人に感じる魅力が関係継続動機に及ぼす影響 個人にとっての重要性の観点から, 対人社会心理学研究, 10, 115-123, 2010.
 - 16) 須藤春佳: 思春期・青年期における身近な同性同年輩関係—関係イメージと同一性との関連より, 京都大学大学院教育学研究科紀要, 51, 232-246, 2005.
 - 17) 鈴木みゆき: 女子大学生における職業的不安と予期および空想との関連, 関東学院教養論集, 24, 41-61, 2014.
 - 18) 川口章: 昇進意欲の男女比較, 日本労働研究雑誌, 54 (2・3), 42-57, 2012.
 - 19) 矢原隆行: 男性ピンクカラーの社会学 ケア労働の男性化の諸相, 社会学評論, 58 (3), 343-356, 2007.
 - 20) 西村純一, 平澤尚孝: SD法による高齢者イメージの世代差と性差の研究, 人間文化研究所紀要, 3, 33-42, 2009.
 - 21) 岡田恵子: 学生が抱く男性高齢者と女性高齢者のイメージ比較, 川崎医療福祉学会誌, 15 (1), 283-288, 2005.
 - 22) 船橋恵子: 看護とジェンダー看護教育, 42 (1), 14-18, 2001.
 - 23) 山田昌弘: 福祉とジェンダー その構造と意味, 家族研究年報, 17, 2-14, 1992.
 - 24) 江原由美子, 山田昌弘: ジェンダーの社会学入門, pp. 22-39, 146-150, 岩波書店, 東京, 2008.
 - 25) 中野妙子, 永井由美子, 山川正信: 看護系進路選択に必要な情報に関する研究 (第1報) 進路指導担当高校教諭への調査から, 大阪教育大学紀要 第III部門 (自然科学・応用科学), 64 (2), 63-71, 2016.
 - 26) 中野妙子, 永井由美子, 山川正信: 看護系進路選択に必要な情報に関する研究 (第2報) 看護学生への調査から, 大阪教育大学紀要 第III部門 (自然科学・応用科学), 65 (2), 27-33, 2017.
 - 27) 鹿内啓子: 高校生における先生・親への進路相談と進路意識との関連, 北星学園大学文学部北星論集, 52 (2), 1-9, 2015.
 - 28) 中野良哉, 中屋久長, 山本双一: 医療系専門学校生の進学動機と学校適応感, 高知リハビリテーション学院紀要, 11 (0), 13-18, 2010.
 - 29) 浦上昌則: 学生の進路選択に対する自己効力に関する研究, 名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科, 42 (2), 115-126, 1995.
 - 30) 坪之内建治, 有田広美: 男性看護師が感じる困難とそれらの困難を経験して成長する過程, 日本看護学会論文集 看護管理, 39, 309-311, 2009.
 - 31) 大山祐介, 戸北正和, 小川信子, 他: 男性看護師に対する女性患者の認知度とニーズに関する研究, 保健学研究, 19 (1), 13-19, 2006.
 - 32) 井澤晴美: 社会人が入学試験受験時に抱いている看護学校への思い, 東京厚生年金看護専門学校紀要, 14 (1), 8-20, 2012.